第三十五講　救の完成（二）　第八章一節の研究　（一月八日）

羅馬書八章の大意は前回に於て述べた、之より各節の研究に入るに當つて羅馬書全体の研究につきて一つの注意を與へたい、羅馬書を研究しつゝ茲に來つて我等は同一の事を反覆し來つたやうな感を免かれない、問題は「義とせらるゝ事」と云ひ「潔めらるゝ事」と云ふが如き二三に止まつて實に單純である、否單調である、如何にパウロが熱誠をつくして述ぶるとも、反覆と單調とは到底免かれ難い、之を現代の如き進歩せる複雑の社會にありて種々雑多の問題に圍繞（いにょう）せらるる者より見て如何にも不調和の感を免かれない、世の思想と事業とが凡て進歩して複雑となれるに、信仰の事のみ斯く單純なるは、あまりに現代と没交渉ではあるまいかと、これ起こりやすき疑惑である。

之について思ひ起すは昨冬米、米國ワシントン府に於て開かれつゝある軍備制限會議のことである、今や世界の視聽は悉く此會議に向つて注がるゝが如き觀がある、こゝに世界各國の第一流の政治家が會合して精力を傾注して商議し、各國の新聞紙はその模様を細大となく精細に報告してゐる、これ今や實に現下の世界最大の問題である、然らば此會議の主題は何であるか、新問題か新研究か新發見か、否、否、否依然として舊（ふる）き人間社會の創まると共に起こりし問題である、しかも其問題は決して複雑ではない、極めて單一、たゞ一つの問題である、即ち人と人との間、社會と社會との間、國家と國家との間に如何にせば正義が行はるゝかの問題である、もし此の正義が行はれぬ時は他の凡ての良き事が——一文明世界の凡ゆる公益も便益も——空しきに歸せしめらるゝ危險

がある、故に此正義が行はれぬときは他の凡ての良き事は有るも無きに等しい、されば如何にせば正義が人の社會に行はるゝかは實に人間世界の最大問題である。

他の多くの書が廢(すた)れつゝある中に聖書のみは何故に廢れないのであるか、何故羅馬書は聖書の中心として常に信者の注意の焦點となつてゐるのであるか、これ人間社會に於ける正義實行の問題をその深き根柢に於て解くは聖書、殊に羅馬書であるからである、けだし人間相互に於ける正義實行の問題は當然遡つて個人の正義實行の問題となり、個人の正義實行の問題はまた當然遡つて神の前に義たる道如何の問題となるのである、何となれば神の前に義たる人にして初めて個人として正義の實行者であり得、個人として正義の實行者である者にして初めて人間相互に對する正義の實行者であり得るからである、故に如何にせば人間社會に正義が行はるべきかの問題はその究竟(くつきよう)に於ては、如何にして人は神の前に義たるべきかの問題に歸着するのである。

故に人類間の平和問題はつまり神人間の平和問題である、人と人との間の正義の問題はつまり神と人との間の正義の問題である、ワシントン會議に於ては我日本人が如何ほど此問題に心を傾けて居るかゞ試驗せらるゝのである、固より會議に列(つらな)れる歐米各國人が悉く篤信の基督信徒であるとは云はない、併し乍ら長年歐米民族を養ひ來りし聖書は彼等の感情と精神とを今尚ほ支配しつゝあらぬと誰か云ひ得よう、先祖は如何、傳統は如何、彼等と雖も自國の利益を思はないではないが、外に一種犯し難き正大の公義的精神を深く持てるは事實である、やはり問題は聖書の問題である、聖書の中心問題が彼等の心の深い所を動かして居るのである、然り或意味に於て聖書は依然として彼等を支配しつゝあるのである、ワシントン會議が今の世界人類の第一問題であるのは、つまり

聖書の問題が世界人類の第一問題であるのである、この意味に於て聖書は依然として人類を支配してゐると云ひ得る、曾て或人の云ふたことがある、「豫言者イザヤが以賽亞書に於て平和の豫言をなせし以來二千六百年間、人類世界は依然として戰を歇めないけれども、併し如何にかして戰いを歇め度しといふ希願と理想とを抱きつゝ來つた」と、平和は實に聖書問題である、聖書の精神は平和實現の日を見ずば已まじと云ふに在る、人類を最も強く動かしつゝあるものは聖書である、故に人類が最も熱心に研究せねばならぬ者は聖書である。

羅馬書八章の骨子は前講に述べし如く罪より免かるゝ事、死より免かるゝ事、神の子とせらるゝ事、世嗣とせらるゝ事である、そして罪より免かるゝ事は一節―四節の主題である、まづ第一節を見よ。

この故にイエスキリストに在る者は罪せらるゝことなし

とある、之を原文に忠實に譯せば

この故に　今や　キリストイエスに在る者は　罪せらるゝ事なし

と改めねばならぬ、。

語は頗る簡單である、之を分析すれば、「この故に」「今や」「キリストイエスに在る者」「罪せらるゝ事なし」といふ四つの語句より成つてゐるのである、かく語は簡單である、しかし意味は決して簡單でない、殊に此一節を前後の意味との連絡上から眺めれば、決して平易簡明といふことは出來ないのである。

「この故に」(ギリシヤ語のara 英語 therefore)は何を受けての語かが先づ難しい問題である、普通この語は一般に直ぐ前の語を受けて云ふ語であるから、七章の末尾を受けたと見るが自然である、しかし斯く見るときは七

章の末節と如何に連絡するかゞ問題となる、七章最後の語は「されば我れみづから心にては神の法に服ひ、肉にては罪の法に従ふなり」である、之れを受けて「この故に」と云ふたとは少しく不合理ではあるまいか、二重人格の状態に於てある故キリストに在る者は罪せらるゝ事なしとは意味を爲して居るであらうか、或は肉は罪の法に従ふも心は神の法に従ふ故――換言すれば實際は低卑なれども理想だけは高逸なる故――キリストに在る者は罪せられぬと云ふ意味か、然る時は基督信者は理想だに高く持てば實狀は如何やうでも良いと云ふ事になるのか、これは誰人も肯ぜぬ所であらう。

かく「この故に」は七章末尾を受けしものと認められぬ以上は、どこか他に適當な所を見出ださねばならぬ事となる、之が明瞭にせられぬ時は道德的に見ても由々しき問題となるのである、故に僅に一句の問題と云ひて之を輕視する事は出來ないのである、ゴオデー其他の註解者は此語を以て七章六節を受けたものと見てゐる、然るときは七章七―二十五節の苦悶の告白は一の挿入文と見られるのである、勿論挿入文と見るのは單に文法上の見方であつて、そのために其意味を輕く見ることにはならぬのである、挿入文と雖も此箇處の如きは主文に優るとも劣らぬ重要の所であることは云ふまでもない。

七章六節を見るに「されども今われらを繫げるものに於て死にたれば律法より釋され、儀文の舊きに由らず靈の新しきに由りて事ふ」とある、これを八章一節の「この故に」が受けたとすれば意味の連絡は頗る合理的である、儀文は棄てゝ聖靈によりて事ふるに至りし故にキリストに在る者は罪せらるゝ事なしと云へば誰にも意味が明瞭となるのである、由來七章六節は前段の結論たる重き語である、この一語に此前の凡ての叙述が總括された

とも云へる、そして今や第八章に入らんとして此語を受けて先づ「この故に」と云ひて、前との關係を保持しつゝ新問題は提供されんとするのである、義とせらるゝ道、潔められるゝ道が既に論ぜられ終りし故、それを受けて八章との境界線の上に立ちて「この故に」と云ふのである、いよいよ之より救の完成、全き榮化を論ぜんとする分水嶺上の「この故に」である、一の小さい語であつても其位置は決して小さくないのである。

「今や」は今に於てはである、キリストすでに我等の罪を擔ひて十字架にかゝりし今は、キリスト既に復活して神の右に坐する今は、此のキリストを信じて義とせられ潔められるゝに至りしは今は……である。

「キリストイエス」と改めねばならぬ、日本譯の「イエスキリスト」は誤譯である、この兩語の間に區別があるであらうか、「イエス」と云ひ、殊に「イエス樣」と云へば其處に一種の親しみが湧く、又「キリスト」と云へば何となく崇高く貴い感じがする、今「キリストイエス」と云へばキリストといふ感じが先に立ち、「イエスキリスト」と呼べばイエスといふ感じが強くなる、「キリストイエス」と云へばキリストと云ふ位に立つ所のイエスを意味する、卽ち復活昇天して今神の右に在りて權能の位に坐する所の、しかし我等に親しき所のイエスを意味する、然るに「イエスキリスト」と云へば我等の友なるイエスといふ觀念が第一となりて、權能者といふ觀念が第二となるのである。

「キリストイエスに在る者」とは何を意味するか、勿論基督者を意味する語ではあるが、キリストの僕と云はず又キリストを信ずる者と云はずキリストに在る者といふたのには意味がある、之はキリストと信者との最も深き關係を語る言葉である、キリストを仰ぐとか、信ずるとか、又はキリストの僕とか云へば未だキリストと己と

を別に見たのである、キリストに在ると云ふのは、己をキリストの中に入れてしまつた狀態である、キリストの大なる靈の中にわが小なる靈が這入つて、二者一つとなつたことである、恰も理想的の君臣、理想的の夫婦の如く乙が甲の心の中に飛びこんで了つた有樣である、キリストに在るとはキリストとの合體である、故に信仰の最も徹底せるものである、基督信者は勿論キリストを信ずる者であり、又キリストの僕たる者である、しかしキリストとの最も深き關係を示す語としては「キリストに在る者」である、實に美はしき語である。

「キリストイエスに在る者は罪せらるゝ事なし」といふ、罪せられぬと云ふこと、神より滅亡の宣告を與へられぬと云ふこと、罪の果たる死滅を課せられぬと云ふこと、これ人たる者の最上の希願且努力でなくてはならぬ、故にキリストにある者は罪せられずといふは實に大なる福音である、キリストに在りさへすれば罪の果たる罰を免かるゝと云ふのである、實に大なる特權、至大の恵みである、刑罰の恐怖は眞實に神を懷ふ者に於ては免かれ難き所である、神の大法の神聖嚴肅なるを知り又自己の罪の深重夥多なるを知りては、良心の鋭敏なるもの誰かこの恐怖なきを得よう、故に罪せらるゝ事なきを知りて此恐怖の失する時、言ひ難き平安は人の魂に漲るのである。

八章一節は短けれども偉大なる言葉である、この語が實驗上の事實として味はれ、心の底より自分の語として發せらるゝは實に幸なる時ではないか、何者を以ても我は罪せられず自己の深き罪を以てしてさへ罪せられずと知りて、何らの幸か之に過ぐる者があらうか、既に神より罪せらるゝ事なしとの聲を聞いたのである、されば天上天下如何なる事が我に起り如何なるものが我を襲ふても、患難、迫害、飢餓、危險、刀劍其他のあらゆる惡し

き事が來ても、死が來てさへも、未來永劫罪せらるゝ事なしとの確信が起るのである、かのバンヤンがキリストに身を隱せし者には刑罰の臨む筈なしと堅く信じて、神をさへ挑(いど)むの大膽(だいたん)に達せし如き、まことに此實驗の芳烈なるを語るものである、我等は羅馬書八章一節を單にパウロの語として反覆するに止まらず、又これを研究して其貴さを知るに止まらず、之を自己の實驗として體得し自己の靈魂の聲として發し得るに至らなくてはならぬ。

講演約說

筆者曰ふ、約說實は原稿である、畔上君の編纂に次いで之を揭ぐるは重複の嫌ひありと雖も、聖書の言は幾回重複するも益あって害がない、讀者が前後兩編を合せ讀んで更に深くパウロの言を味はれん事を望む。

第三十五講約說

罪より免かるゝ事

○國家問題と云ひ、世界問題と云ひ、別の問題ではない、單純なる、廣く知れ渡りたる正義問題である、去年（一九二一（大正十年）十一月十一日より、全世界凝視の中心となりて開かれ來たりし華盛頓(ワシントン)會議に於て文明諸國最大の改治家達に由て討議せられし問題は哲學又は科學又は藝術の問題ではなくして何人にも能く判る正義問題であつた、如何にして明白なる正義を國と國との間に實行せん乎、是が大政治家の頭腦(あたま)を惱ます最大問題である、ま

ことにマツシユー・アーノルドが曰ひしが如くに「人生十分の九は正義である」、正義を發見し、正義を實行す、人生十分の九は之にて盡きて居るのである。

○聖書の貴き理由は茲に在るのである、其れは特に正義の書であるからである、聖書は第一に神と人との義しき關係に就て教へる、第二に人と人との義しき關係に就て教へる、其れ故に聖書は永久的に貴いのである、而して世界思想を支配する者は聖書である、華盛頓會議も亦聖書の教を國際的に實行せんが爲に開かれたに過ぎないのである、今より二千七百年前に豫言者イザヤの發せし言、卽ち「劒を打かへて鋤となし、槍を打ちかへて鎌となし、戰鬪の事を復び習はざるべし」との言が今や其實現を見んとしつゝあるのである、故に聖書を知らずして世界は判らない、聖書を知るは個人として、國家として、人類として最も必要である、我等は聖書を學んで閑問題を學びつゝあるのではない、最も實際的の最大問題を研究しつゝあるのである。

○羅馬書第八章は聖書の最高峰である、故に其一言一句も忽せにする事は出來ない、其第一節に曰く「是故にイエスキリストに在る者は罪せらるゝ事なし」と、全章を紹介する辭として甚だ大切である、「是故に」は前章末節を受けた辭として見る事は出來ない、さう見る場合には心にては神の法に服へども肉にては罪の法に服ふ者は罪せらるゝ事なしと云ふ事になる、勿論然かありやう筈はない、故に「是故に」は前章六節を受けた者と見るが正當である、而して七章六節は五章一節以下の結論であるが故に、「是故に」は五章以下七章までの議論の結論を受けて云ふ者と見るが當然である、卽ち信仰に由て義とせられ、キリストの死と復活とに由て潔められるゝが故に、「是故に」と云ふのである、希臘語の小辭（パーチクル）(gar)であるが、其解釋如何に由て信者の信仰上並に實踐道德

上に大なる相違を生ずるに至るのである。

○「イエスキリスト」は改譯には原語の通りに「キリストイエス」と成つて居る、それが本當である、而してキリストイエスと云ふはイエスキリストと云ふと少しく違ふ、キリストイエスは復活し、昇天し、今は聖父の右に座して萬物の上に其大能を揮ひ給ふ榮光のイエスである、卽ちキリストなるイエスである、而かも單に神なるキリストではない、神にして人なる卽ちイエスなるキリストである、イエスキリストと云ふ場合には人なるイエスが高調せられ、キリストイエスと云ふ場合には神なるキリストが強唱せらる、而して信者が今仰ぎ賴む者は榮光の寶位（みくらひ）に座し給ふキリストイエスである。

○「キリストイエスにある者」　クリスチャンの何たるかを示したる辭（ことば）である、クリスチャンは單にキリストを信ずる者ではない、彼を崇（あが）め又拜む者ではない、「キリストに在る者」である、キリストの內に自己を投込（なげこ）んだ者である、キリストと同體に成つた者である、我れ彼に在り彼れ我に在りと云ふ狀態に於て在る者である、「人もし我に居り、我れ亦彼に居らば」と約翰傳十五章五節に云ふ其狀態である、親密其極度に達したる關係である、基督信者と云ふよりも更に深い意味を含む名稱である。

○「罪せらるゝ事なし」　改譯には「罪に定められるゝ事なし」とある、罪を言渡（いひわた）さるゝ事なし又罪を罰せらるゝ事なし、罪と其結果とより全然釋放せらるとの意である、罪責（ギルト）並に刑罰より免かるとの事である、キリストに在る者には完全なる赦免（ゆるし）があるとの事である。

○改譯に倣ひ「是故に」の次に「今」と云ふ辭（ことば）を入れるの必要がある、神の恩惠を信じ、キリストの內に自己を

投入し者は今や罪せらるゝの恐怖なしとの事である、「今」は不信時代の過去に對して云ふのである。

○「罪せらるゝ事なし」と云ふ、是れ何人に取りても大恩惠である、信仰の一面はたしかに罪の當然の結果たる刑罰の恐れよりの解脫である、此恐怖なくして福音の福音たる理由は判らない、然かも近代人に此恐怖がないのである、彼等は神は愛なりと稱へて彼が罪を憎み、罪人の責任を問ひ、悔改めざる罪人を罰し給ふ事を信じないのである、近代人は神の愛を誤解して彼を恐れない、彼等は聖書に「活ける神の手に陷いるは恐るべき事なり」（希伯來書十章三一節）と讀んで其恐ろしさを感じない、彼等が福音の有難さを感じ得ない理由は茲に在る、彼等が又宗教的熱心を發し得ざる理由も茲に在る、パウロを始めとしてルーテルも、コロムウェルも、バンヤンも、深い信者と云ふ信者はすべて此恐怖を感じた、自身地獄に墮ちたる實驗のあるダンテが彼の『神曲』を著はし得たのである、而して此實驗なき近代の宗教家と文學者とは『神曲』の藝術的方面を解し得るに止まつて、其信仰的心髓は到底之を探り得ないのである。

第三十五講　救の完成（二）　第八章一節の研究　現代語訳

羅馬書八章の大意は前回において述べた。ここから各節の研究に入るにあたって、羅馬書全体の研究について一つの注意を伝えておきたい。羅馬書を研究しながらここに来て、我々は同じことを繰り返してきたような感覚を拭えない。問題は「義とされること」と言い「きよめられること」と言うような二三点にとどまり、実に単純である。いや、単調である。いくらパウロが熱意を尽くして述べていても、重複と単調さはどうしても避け難い。これを現代のような進歩した複雑な社会にあって、多様で雑多な問題に囲まれている者の視点から見ると、いかにも不調和な印象を免れない。世の中の思想や事業がすべて進歩して複雑になっているのに、信仰のことだけがこれほど単純なのは、あまりにも現代とかけ離れすぎているのではないか、という疑念が起こりやすい。

これについて思い起こすのは、昨冬、アメリカのワシントン市で開かれている軍備制限会議のことである。今や世界中の注目がこの会議に注がれている観がある。ここには世界各国の第一線の政治家が集まり、精力を注いで議論を重ね、各国の新聞はその模様を事細かに細部まで報告している。これは今まさに、現代の世界における最大の問題である。では、この会議の主題は何であろうか。新しい問題か、新しい研究か、新しい発見か。否、否、否。依然として古い人間社会の始まりと共に生じた問題である。しかもその問題は決して複雑ではない。極めて単一な、ただ一つの問題である。つまり、人と人との間、社会と社会との間、国家と国家との間にどのようにすれば正義が行われるかという問題である。もしこの正義が行われないなら、他のすべての素晴らしいこと―

―文明世界のあらゆる公益も便利さも――が無に帰してしまう危険がある。それ故に、この正義が行われないときは、他のあらゆる良いことも無に等しい。従って、どのようにすれば正義が人間の社会で行われるかは、実に人間世界の最大問題なのである。

他の多くの書物が廃れていく中で、なぜ聖書だけは廃れないのか。なぜ羅馬書は聖書の中心として、常に信仰者の注意の焦点であり続けているのか。それは、人間社会における正義実行の問題を、その深い根底において解き明かすのが聖書、特に羅馬書だからである。そもそも人間同士における正義実行の問題は、当然さかのぼって個人の正義実行の問題となり、個人の正義実行の問題はまた当然さかのぼって「神の前に義とされる道はいかなるものか」という問題になるからである。なぜなら、神の前に義とされる人であって初めて個人として正義の実行者であり得るのであり、個人として正義の実行者である者であって初めて人間相互に対する正義の実行者であり得るからである。それ故に、どのようにして人は神の前に義とされるべきかという問題に帰着するのである。

それ故に、人類の間の平和問題は、詰まるところ神と人との間の平和問題である。人と人との間の正義の問題は、詰まるところ神と人との間の正義の問題である。ワシントン会議においては、我々日本人がどれほどこの問題に心を傾けているかが試されている。もとより会議に列席している欧米各国の人が全員熱心なキリスト教信者であると言うつもりはない。しかしながら、長年欧米の民族を育んできた聖書が、彼らの感情と精神を今なお支配しているわけがないと誰が言えようか。先祖はどうであったか、伝統はどうであったか。彼らとて自国の利益を考えないわけではないが、その根底には犯し難い正大で公義に満ちた精神を深く持っているのは事実である。

やはり問題は聖書の問題である。聖書の中心的な問題が彼らの心の深い部分を動かしているのである。そう、ある意味において聖書は依然として彼らを支配し続けているのである。ワシントン会議が現在の世界人類にとって最大の第一問題であるのは、つまり聖書の問題が世界人類の第一問題だからである。この意味において、聖書は依然として人類を支配していると言える。かつてある人が言ったことがある。「預言者イザヤがイザヤ書において平和の預言をして以来二千六百年間、人類世界は相変わらず戦いをやめないけれど、なんとかして戦いをやめたいという願いと理想を抱き続けてきた」と。平和は実に聖書の問題である。聖書の精神は、平和が実現する日を見ないではやまないという点にある。人類を最も強く動かしているものは聖書である。それ故に、人類が最も熱心に研究しなければならないものは聖書である。

羅馬書八章の骨組みは前回の講義で述べた通り、罪から免れること、死から免れること、神の子とされること、跡継ぎとされることである。そして罪から免れることは一節から四節の主題である。まず第一節を見よ。

この故にイエスキリストに在る者は罪せられることなし(内村の原文のまま)

とある。これを原文に忠実に訳せば

この故に 今や キリストイエスに在る者は 罪せられることなし(同)

と改めなければならない。

言葉は極めて簡単である。これを分析すれば、「この故に」「今や」「キリストイエスに在る者」「罪せられることなし」という四つの語句から成り立っている。このように言葉は簡単である。しかし意味は決して簡単ではな

い。特にこの一節を前後の意味とのつながりから眺めると、決して平易で簡単だとは言えないのである。

「この故に」（ギリシア語の ara、英語の therefore）が何を受けての言葉かが、まず難しい問題である。普通この言葉は一般的にすぐ前の言葉を受けて言う言葉であるため、七章の最後の部分を受けたと見るのが自然である。しかし深く見るときは、七章の最後の節とどのようにつながるかが問題となる。七章最後の言葉は「こうして、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」である。これを受けて「この故に」と言ったとするのは少々不合理ではないだろうか。二重人格のような状態にあるからといって、キリストにある者は罪に定められないというのは意味が通るだろうか。あるいは、肉は罪の律法に従っていても心は神の律法に従っているから――言い換えれば実際は低く愚かであっても理想だけは高尚だから――キリストにある者は罪に定められないという意味だろうか。そうだとしたら、キリスト教の信者は理想さえ高く持っていれば実状はどうであっても良いということになるのだろうか。これは誰も納得しない点であろう。

このように「この故に」が七章の最後を受けたものと認められない以上は、どこか他に適当な箇所を見出さなければならないことになる。これが明確にされないときは、道徳的に見ても重大な問題となるのである。それ故、たかが一句の問題だとしてこれを軽視することはできない。ゴーデーその他の注解者はこの言葉をもって七章六節を受けたものと見ている。そうなると、七章七節から二十五節までの苦悶の告白は一つの挿入文と見なされることになる。もちろん挿入文と見るのは単に文法上の見方であって、そのためにその意味を軽く見ることにはならない。挿入文であっても、このような箇所は主文に優るとも劣らない重要な部分であることは言うまでもない。

七章六節を見ると「しかし今は、私たちは自分を縛っていた律法に死んだので、律法から解かれました。その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです」とある。これを八章一節の「この故に」が受けたとすれば、意味のつながりは極めて合理的である。文字の律法を捨てて聖霊によって仕えるようになったからこそ、キリストにある者は罪に定められないのだと言えば、誰にでも意味が明確になる。もともと七章六節は前段の結論となる重い言葉である。この一言にこれまでのすべての記述が総括されたとも言える。そして今や第八章に入ろうとしてこの言葉を受け、まず「この故に」と言って前との関係を保ちながら新しいテーマを提供しようとするのである。義とされる道、きよめられる道が既に論じ終わったため、それを受けて八章との境界線の上に立ち「この故に」と言うのである。いよいよここから救いの完成、完全なる栄化を論じようとする分水嶺の上の「この故に」である。一つの小さな言葉であっても、その位置は決して小さくないのである。

「今や」は今においてはである。キリストがすでに我々の罪を担って十字架にかかった今は、キリストが既に復活して神の右に座している今は、このキリストを信じて義とされ、きよめられるに至った今は……である。

「キリストイエス」と改めなければならない。日本語訳の「イエスキリスト」は誤訳である。この二つの言葉の間に違いがあるだろうか。「イエス」と言い、特に「イエス様」と言えばそこに一種の親しみが湧く。また「キリスト」と言えば何となく尊く貴い感じがする。今「キリストイエス」と言えばキリストという感じが先立ち、「イエスキリスト」と呼べばイエスという感じが強くなる。「キリストイエス」と言えば、キリストという立場に立つイエスを意味する。即ち復活昇天して今や神の右にあって権能の座に就いている、しかし我々に親しいイエ

スを意味する。これに対して「イエスキリスト」と言えば、我々の友であるイエスという観念が第一となり、全能者という観念が第二となるのである。

「キリストイエスに在る者」とは何を意味するか。もちろんキリスト者を意味する言葉ではあるが、キリストのしもべと言わず、またキリストを信じる者と言わず、キリストに在る者と言ったのには意味がある。これはキリストと信者との最も深い関係を語る言葉である。キリストを仰ぐとか、信じるとか、あるいはキリストのしもべとか言えば、まだキリストと自分とを別々に見ている。キリストに在るというのは、自分をキリストの中に入れてしまった状態である。キリストの大きな霊の中に自分の小さな霊が入って、両者が一体となったことである。あたかも理想的な君臣や夫婦のように、一方が他方の心の中に飛び込んでしまった様子である。キリストに在るとはキリストとの合体である。それ故に信仰の最も徹底した姿である。キリスト教信者はもちろんキリストを信じる者であり、またキリストのしもべである者である。しかし、キリストとの最も深い関係を示す言葉としては「キリストに在る者」がふさわしい。実に美しい言葉である。

「キリストイエスに在る者は罪せられることなし」と言う。罪に定められないということ、神から滅びの宣告を与えられないということ、罪の結果である死滅を課されないということ、これこそ人間としての最上の願いであり努力でなければならない。それ故にキリストにある者は罪に定められないというのは実に大きな福音である。キリストに居さえすれば罪の結果である罰を免れるというのである。実に大きな特権であり、最高の恵みである。刑罰の恐怖は、真実に神を思う者にとっては避け難いものである。神の律法の神聖で厳粛であることを知り、ま

た自分の罪の深さと多さを知っては、良心の鋭い者なら誰がこの恐怖を持たずにいられようか。それ故、罪に定められないことを知ってこの恐怖が消えるとき、言葉にできない平安が人の魂に満ち溢れるのである。

八章一節は短くとも偉大な言葉である。この言葉が体験上の事実として味わわれ、心の底から自分の言葉として発せられるのは実に幸いな時ではないか。何ものによっても自分は罪に定められず、己の深い罪によってさえも罪に定められないと知って、これ以上の幸いがあろうか。既に神から「罪に定められることはない」という声を聞いたのである。それなら、天においても地においても、どのような出来事が自分に降りかかろうとも、苦難、迫害、飢え、危険、剣、その他のあらゆる悪しきことが来ようとも、死が来てさえも、未来永久に罪に定められることはないという確信が起こるのである。かのバンヤンが「キリストに身を隠した者には刑罰が臨むはずがない」と堅く信じて、神にさえ挑むほどの極めて大胆な境地に達したように、まことにこの体験の素晴らしさを物語るものである。我々は羅馬書八章一節を単にパウロの言葉として繰り返すにとどまらず、またこれを研究してその尊さを知るにとどまらず、これを自己の体験として体得し、己の魂の声として発することができるようにならなければならない。

講演約説

筆者は言う。この「約説」は実は講演の原稿である。すでに畔上君が編集したものが掲載されているので、これを改めて載せるのは重複する嫌いもある。しかし、聖書の言葉は何度繰り返しても益こそあれ害はない。読者

が両方の記事をあわせて読み、さらに深くパウロの言葉を味わってくださることを願う

第三十五講約説

罪より免れること

○国家問題と言い、世界問題と言い、別の問題ではない。単純で、広く知れ渡っている正義問題である。去年（一九二一（大正十）年）十一月十一日から、全世界の注目の中心となって開かれてきたワシントン会議において、文明諸国の最大の政治家たちによって討議された問題は、哲学や科学や芸術の問題ではなく、誰にでもよく分かる正義問題であった。どのようにして明白な正義を国と国との間で行うか。これが大政治家の頭を悩ませる最大の問題である。まことにマシュー・アーノルドが言ったように「人生の十分の九は正義である」。正義を発見し、正義を実行する。人生の十分の九はこれで尽きているのである。

○聖書が尊い理由はここにある。それは特に正義の書だからである。聖書は第一に神と人との正しい関係について教える。第二に人と人との正しい関係について教える。それ故に聖書は永久に尊いのである。そして世界思想を支配する者は聖書である。ワシントン会議もまた聖書の教えを国際的に実行するために開かれたに過ぎないのである。今から二千七百年前に預言者イザヤが発した言葉、即ち「彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もう戦うことを学ばない」（イザヤ書二章四節）という言葉が、今やその実現を見ようとしているのである。それ故に聖書を知らずして世界は分からない。聖書を知ることは個人として、国家と

して、人類として最も必要である。我々は聖書を学んでどうでもいい問題を学んでいるのではない。最も実践的な最大問題を研究しているのである。

○羅馬書第八章は聖書の最高峰である。それ故にその一言一句もゆるがせにすることはできない。その第一節に「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」とある。全章を紹介する言葉として非常に大切である。「こういうわけで」は前章の最後の節を受けた言葉と見ることはできない。そう見る場合には、心では神の律法に従っていても肉では罪の律法に従う者は罪に定められないということになってしまう。もちろんそんなはずはない。それ故に「こういうわけで」は前章六節を受けたものと見るのが正当である。そして七章六節は五章一節以下の詳しい解説の結論であるから、「こういうわけで」は五章から七章までの議論の結論を受けて言っているものと見るのが当然である。即ち、信仰によって義とされ、キリストの死と復活とによってきよめられるが故に、「こういうわけで」と言うのである。ギリシア語の小辞（gar）であるが、その解釈の仕方によって信者の信仰上ならびに実践道徳上に大きな違いを生じることになるのである。

○「イエスキリスト」は改訳では原語の通りに「キリストイエス」となっている。それが本当である。そしてキリストイエスと言うのはイエスキリストと言うのと少々違う。キリストイエスは復活し、昇天し、今は父なる神の右に座して万物の上にその大能を振るわれる栄光のイエスである。即ちキリストであるイエスである。しかも単に神であるキリストではない。神であり人である、即ちイエスであるキリストである。イエスキリストと言う場合には人であるイエスが強調され、キリストイエスと言う場合には神であるキリストが強く主張される。そし

て信者が今仰ぎ頼む者は、栄光の宝座に座しておられるキリストイエスである。

○「キリストイエスにある者」とはクリスチャンとは何かを示した言葉である。クリスチャンは単にキリストを信じる者ではない。彼をあがめ、また拝む者ではない。「キリストに在る者」である。キリストの中に自分を投げ込んだ者である。キリストと同体になった者である。我が彼に居り彼が我に居るという状態にある者である。「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります」（ヨハネの福音書十五章四節）と言うその状態である。親密さが極限に達した関係である。キリスト教信者と言うよりもさらに深い意味を含む名称である。

○「罪せられることなし」改訳には「罪に定められることは決してありません」とある。罪を言い渡されることなし、また罪を罰せられることなし、罪とその結果から完全に解放されるという意味である。罪の責任ならびに刑罰から免れるということである。キリストに在る者には完全な赦しがあるということである。

○改訳にならい「こういうわけで」の次に「今」という言葉を入れる必要がある。神の恵みを信じ、キリストの中に自分を投入した者は、今や罪に定められる恐怖はないということである。「今」は不信だった過去に対して言っているのである。

○「罪せられることなし」と言う。これは誰にとっても大きな恵みである。信仰の一面は確かに罪の当然の結果である刑罰の恐れからの解放である。この恐怖なしに福音の福音たる理由は分からない。しかも現代人にはこの恐怖がないのである。彼らは「神は愛なり」と唱えて、神が罪を憎み、罪人の責任を問い、悔い改めない罪人を罰されることを信じないのである。現代人は神の愛を誤解して神を恐れない。彼らは聖書に「生ける神の手に陥

ることは恐ろしいことです」（ヘブル人への手紙十章三十一節）と読んでその恐ろしさを感じない。彼らが福音の有り難さを感じられない理由はここにある。彼らがまた宗教的な熱心さを起こせない理由もここにある。パウロをはじめとしてルターも、クロムウェルも、バンヤンも、深い信者と言われる信者はすべてこの恐怖を感じた。自身地獄に落ちた体験のあるダンテが彼の『神曲』を著すことができたのである。そしてこの体験のない現代の宗教家と文学者は、『神曲』の芸術的な面を理解するにとどまって、その信仰的な真髄には到底到達できないのである。